

資料5 : 同第V章現地調査の成果

MEMO

A large rectangular area containing horizontal dashed lines, intended for handwritten notes or a memo.

5. 熊野座神社調査地

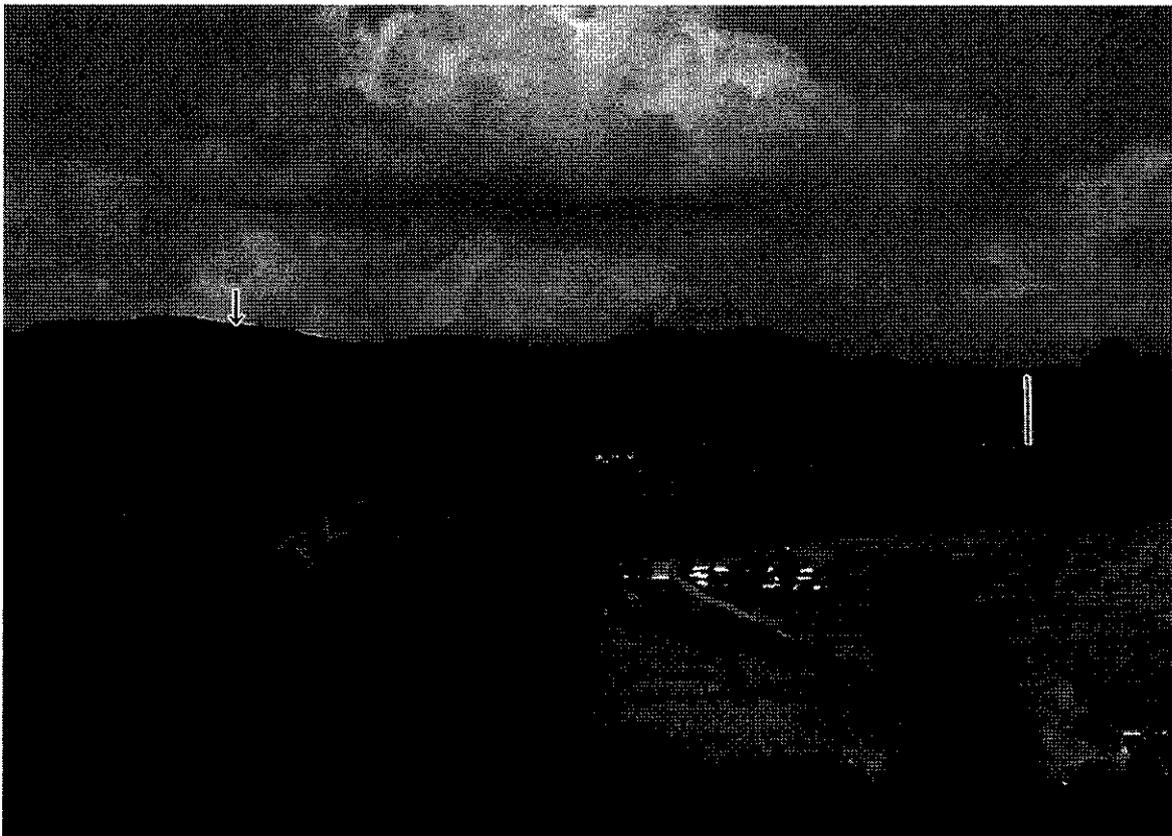
a. 調査地の位置と環境（第1図～第3図・第15図）

本調査地は山鹿方面と熊本方面を結ぶ脇往還に面し、少し南に進めば田原坂本道（三池往還、豊前街道高瀬道）と合流する。字は「宮山」といい、記録類によると薩摩軍の主要陣地である「田原坂北之手松山台場」あるいは「小松山台場」などと呼ばれていたようだ。参道は東向きでその下の段下の土地は字「宮ノ前」で、付近一帯は田原坂の戦いのはじめ頃から繰り返し「宮山争奪戦」の舞台になった。

近くの最高所は南方にあり標高116m、この西は三ノ坂に面し付近では未使用弾がまとまって出たとの話がある。平坦地は北に向かって次第に高さを減じ、本調査地は109m～97mの間で、それから96mほどとなり、台地最北端の田原城跡・寺跡調査地で少し高さを増して98.8mになる。台地北端のその西に突き出た舌状地からは、西方の政府軍本営があった木葉が直接視認でき、人の動きまでよく見える。本調査地の西には谷集落から比高80mほどの谷が入り、東は豊岡本村南の比高52mの谷が神社正面まで屈曲して入る。この西と東の谷に挟まれた豊岡台地北端の、いくつかある狭小平坦地の中央部に位置する。

調査地は東西85m、南北100m、面積8,000㎡、社殿建設範囲は平坦に造成されている。道路から2mほど高く、社殿裏はさらに3～6mほど上位にある。ここは豊岡地区の鎮守の森らしくうっそうとした木々に覆われ、社殿は鎮守社としての風格を静かにたたえている。二俣台地から遠望するとこんもりとした木立がわかり、近づいて東や北から望むと丸い古墳のような森で、調査指導では当時もこの状態だったとすれば、政府軍からの攻撃の格好の目印になっていたであろうとの教示をいただいた。

また、すぐ北方には田原城跡・田原寺跡があり、西南戦争遺跡と中世山城の関係を知るうえでの好地である。近くには弾痕のある建治三年（1277）銘の田原五輪塔などの石造物があり、「ジョウヤマミチ」などの言い伝えも聞かれ、中世土器も採集される。



東方の豊岡台地を二俣台地から望む
画面中央は田原坂公園と慰霊塔、左に熊野座神社の森が見える（↓印）

本調査地の南境は現状では途中で南に直角に屈曲する直線的な東西方向の細い掘抜道で、北側には土塁状の高まりが平行する。この高まりは社殿造成時の掘り残しとも考えられるが、不明な部分が多い。この細道は古い時代の田原城跡の堀跡との話が地元には伝わる。この場所は東の谷頭と西の谷の間の部分を横切っており、同様な東西方向の掘抜道は他に北に2本あり、その間は約120m(1町=60間)の同幅同面積の区画である。東側の直線の南北道路は長さ約150mで、以前は幅2mほどだったとのことだが城の馬場のことも考えておく必要がある。これらからみて、本調査地は中世城跡の一部だった可能性が指摘でき、堀跡や土塁状の高まりは田原坂の戦いのときには、塹壕や胸壁として利用されたと考えられる。

b. 現地調査の成果

本調査地は事前の踏査の際に、地元の方の聞き取り調査で、神社境内地であり土地は大きな改変はなされていないとご教示いただいていたので調査対象とした。しかしながら、人の往来が活発な土地であり遺物は多くがすでに採集されてしまっているのではないかとの危惧を抱きつつ調査を開始した。しかし、予想に反して遺物は多くかつ保存状況もよく、大きな成果を上げることができた。

現地調査地は地元で大切にされている社殿や境内地であり、トレンチ調査などの土地を掘り下げる調査は実施せず、金属探知機による遺物分布調査と地表面の観察および遺物測点測量、地形測量、立木調査、社殿調査を行った。これらの調査により遺物が調査地全体に分布すること、地表面や地形の形状と関係した遺物分布状況が確認でき、また、陣地跡らしき遺構も確認した。

(1) 遺構の状況 (第33図～第38図)

本調査区では戦時には主として樹木や石造物や土囊などを胸壁にしていたためか、確認できた構築遺構は調査区の南端で確認した陣地状遺構だけである。陣地状遺構は南境の掘抜道に接し、道から北に出張つ



熊野座神社調査地全景 東より

た半円形の土手と溝が巡る遺構と双円丘状の遺構がある。北側には小銃弾の集中がみられ四斤砲弾片も3点あるが、薬莖は1点の確認にとどまる。

半円形遺構の大きさは現状で南北9.5 m、東西11 m、土手下幅2.8 m～3.5 m、内部溝上幅3.2 m～4.1 m、深さは西で1.6 m、東で0.7 mである。社殿造成掘削範囲と東西方向の土手に接しており、樹木を中心として直線形土手に半円形土手を付加した形で、一部を通路として掘開している。溝底は平坦ではなく、地形に合わせて西が高く東が低い。半円形土手の北と東は一部が途切れて低くなっており、銃眼かもしれない。樹木を弾除けとしつつ、その周囲を半円形に掘削して陣地にしたと考えられる。ここはもともと標高が高く境内地平坦面より5 mほど高位にあり視射界も広く、掘削斜面を利用して優位的な場所を占めようとした陣地跡であろう。

双円丘状の遺構は掘抜道の屈曲部の、半円形遺構の西の土手が通路状に途切れた先にある。円丘が二つ接続した形で、大きさは長径9.1 m、短径5.3 m～6.1 m、高さは北1 m、南0.7 mである。

このように道から出張る形の遺構は、山頭遺跡第5次調査地薩摩軍陣地跡に類似する。山頭遺跡で確認された遺構は長さ4.49 m、幅2.58 m、深さ0.11 mの浅い土坑状で、本来は長さ5～6 m、深さ0.3 mほどと推定されている。出土遺物は1581点で、雷管や薬莖の火点遺物が多く出土した。

(2) 遺物の分布状況 (第33図～第38図)

遺物分布は調査地の全域に広がるが、種類によって分布に粗密と位置の相違がある。

未使用弾 スナイドル未使用弾の1～4は薬莖集中部E、5は集中部F、6は陣地状遺構にあった。7～9の3点は調査地中央西端に集中し、この場所には薬莖の分布はないが陣地があったことが推定できる遺物である。弾頭にはA1、A2、Bタイプの3タイプがあり、攻撃側のスナイドル銃弾に少なくともこの3タイプがあったことがわかる。



熊野座神社調査地全景(北より)

薬 莢 薬莢の分布はA～Fの6カ所に集中部がある。集中部は小銃を発砲した場所を示し陣地や人がいたことを表すと思われる、A・17点、B・5点、C・3点、D・17点、E・22点、F・27点、南東隅1点、陣地状遺構1点、表採1点の合計94点である。遺存状況の良い薬莢は集中部AとFに多い傾向がある。

薬莢の多くは調査地東半部にあり、東側や北側に向けて発砲したことを示す。集中部AとBは道路際の縁辺樹木周辺にあり、同じく道路際の榎木、杉木、樹木1、樹木2で確認された小銃弾や金属反応点と合わせて、樹木を弾除けにして東や北からの攻撃に最前線に対応していたことが想定される。集中部Aの薬莢は残存の良さや集中状況からみて、当時から移動があまりないと考えられ、完成品の10～13の4点や半折の14もまとまっている。同所の手てんご薬莢26も道路際の東側斜面にあり、これらは具体的な陣中のありようを示す格好の遺物と思われる。

集中部C、D、Eは道路から約15～20mほど奥に入るが、周囲には樹木がある。集中部Fにも樹木が段上縁辺沿いにあり、道路からは50mほど離れているが、やはり東側や北側に向けて発砲したのだろう。Fでの分布状況は段上縁辺から下に転がり落ちた状態を示していると思われる、集中部Aに比べれば遺存状況は悪いが、全体から見ればよく残っている部類である。

薬莢の分布に大きな移動がなく、戦いの状況を示すとすれば、東側や北側に反撃するにあたっては陣地や胸壁が道際、平坦地中央部、段上の3段階に構築されていたことを示す可能性がある。また、本調査地＝陣地内に樹木が多いという特徴が、防御の弾除け盾になる一方、攻撃の際には樹木が邪魔になる場合もあったと思われる。このため、視界がひらける最前線の道路際まで出ることとなり、このことが、道路沿いの縁辺に薬莢が分布する理由の一つと考えられる。

小銃弾 小銃弾は人の往来がある社殿を中心とする境内裸地には少なく、往来があまりない草地で多く確認された。これは焼失した社殿の再建工事などに伴って周辺が整地整備され、発見採集された結果かも



熊野座神社 正面(東より)



参道と弾痕のある石灯笼(北より)

しれない。分布には集中が密なところと粗のところがある。集中するところのうち、薬莢集中部と重なる範囲は調査地東半部の集中部 A、B、C、E で、重ならないところは北端部、南端部の陣地状遺構周辺、西端部である。薬莢集中部と重なる範囲はその場所に陣地があって、そのまま攻撃と反撃の状況を示すことが考えられる。北端部は砲弾片分布と重なり、薬莢集中部 F が攻撃されたものか。南端部の陣地状遺構周辺にもやや集中するが、遺構には薬莢などは少ない。西端部斜面の小銃弾は西側からの攻撃によるものと思われるが、本調査地の西側隣接地は大きく削平されていたので、薬莢分布などは全く確認できていない。ただ、この場所には西の谷集落から台地上に上る天神坂など数本の坂道が接続し、崖面には極めて多くの小銃弾が撃ち込まれていたようで、後には崖面崩落に伴い白錆の小銃弾で、道路面が一面雪のように真っ白になっていたとの話が伝わっている。

興味深いのはスナイドル銃弾 417 と 436 で、これらは地表面の朽ち木の中で見つけた。状況からみて立木に撃ち込まれた小銃弾が、倒木後に周囲の木質が腐食し、その結果姿を現したものと思われる。同様な事例は他にもあると考えられ、調査の際には注意を要する。また、榎木や杉木の小銃弾とあわせて、小銃弾が樹木に衝突したときの変形の一例を知ることができる良好な資料になった。

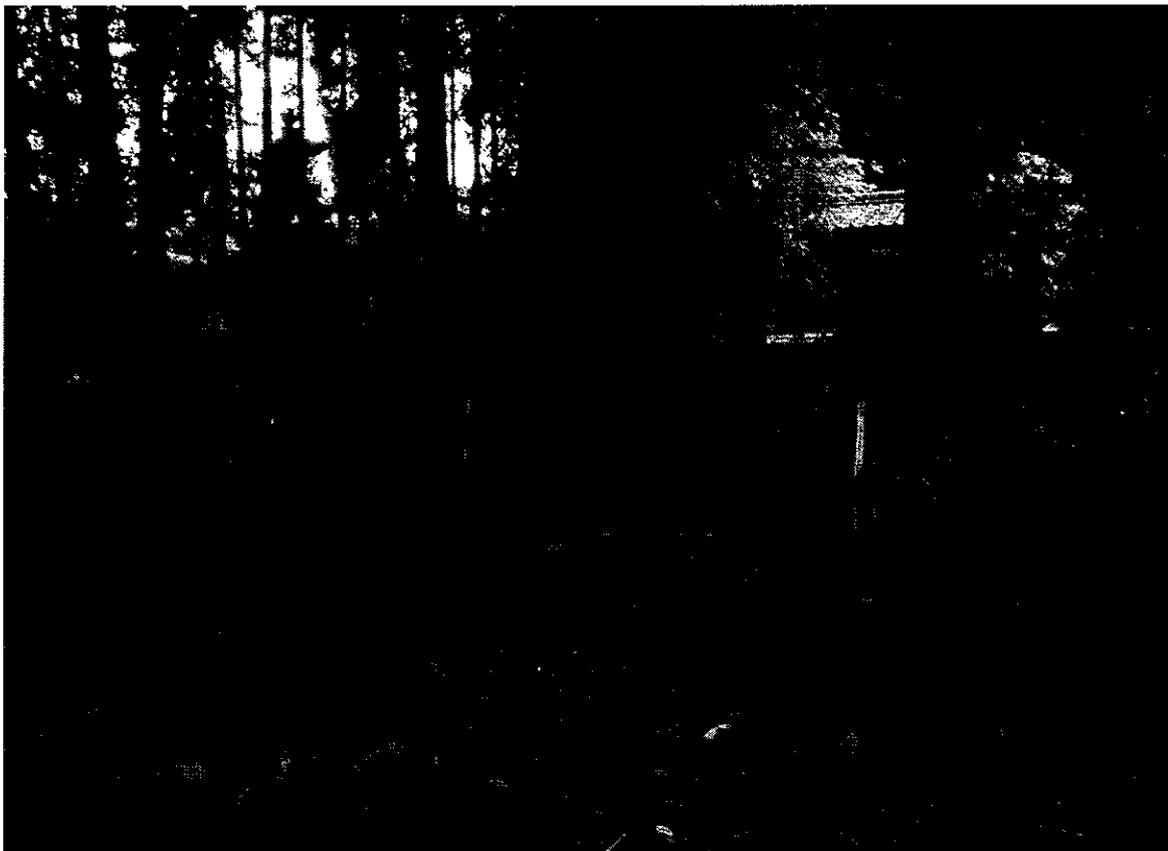
エンフィールド銃弾は 41 点で、鉛不足や弾頭だけの a1、a2 タイプがあり、これは政府軍が発砲したものとは考えにくく、スペンサー銃弾とウェストリーリチャーズ銃弾もある。これらは東半の道路沿いに主に分布しており変形度が大きいものが多いので、この場所に陣地を構えた薩摩軍のものだろう。西から発砲したものが樹木などに衝突したと考えられ、エンフィールド銃弾やその他の銃弾が他の調査地より多いのは、陸地内に樹木が多いという特徴が理由と考えられる。

砲弾 砲弾には十三拇臼砲弾と四斤砲榴弾がある。分布は小銃弾と同じく、人の往来がある境内裸地にはなく、往来があまりない草地で多く確認された。臼砲弾は 1 点のみで大部分が四斤砲榴弾片で、榴霰弾片は採集されていない。ただ、霰弾子はあるので榴霰弾での攻撃はあったと考えられる。砲弾片は調査地全体に散在し数多くはないが、社殿北側にやや集中する傾向があり、参道東端の小銃弾と四斤砲榴弾片内蔵の北側杉木の周辺、および陣地状遺構のある調査地南端部にも分布がある。

社殿北側集中箇所には、60～79 の 20 点がまとまって 1 カ所で見つかった推定砲弾着弾地点があり、他に 35 m×20 m の範囲に 26 点あるので、合計 46 点が分布する。推定砲弾着弾地点では底部片と 2 点の側部片を除く採集した側部片はすべて接合した。通常、四斤砲弾は着弾すると爆発して破片は四散するので、2 点の破片ですら接合することはない。この場所は土質が軟らかく着弾してもすぐには爆発せず、深く土中に入った後に爆発したので側部片は四散せずに留まり、底部片だけが飛び去ったものと考えられる。これは極めて稀な事例であり、砲弾着弾地点がほぼ特定されたのはほとんど類例がないのではないかと。また、デマレー着発信管の感度に関する資料としても好例になった。

他の 26 点の分布からは、着弾した土質や樹木などに大きく影響されるだろうが、本調査地での四斤砲榴弾の大小破片の飛散範囲をある程度知ることができると思われ、その範囲は小片の位置からみて最大径 50 m ほどだったかもしれない。破片の中には、弾頭部から底部までの大型側部片 3 があり、一方では 2 の信管 1 点、46 や 49～52 の筒翼 5 点、8 や 31～35 などの弾殻小片 11 点の小型片もある。大型破片だけでなく、径 2 cm 弱の筒翼や 1～3 cm ほどの小片も、四散して殺傷力を高めたのだろう。さらに、他に中型片もあることから、この場所付近が数発の砲撃にさらされた一端を示していると考えられる。

北側杉木周辺の榴弾片のうち 14、24、26、42 の 4 点は小片で、少し離れた 20 や 38 も含めて北側杉木内蔵砲弾片 44 と一体の砲弾だった可能性がある。44 の確認位置と方向からみると、調査地南東端あたりに着弾したものかもしれない。また、近くには 56 と 59 の霰弾子が 2 点ある。調査地南端部では比較的大型破片の 18 もある。全体的な遺物と遺物散布状況よりみて、本調査地は臼砲や四斤山砲の榴弾や榴霰弾による重点攻撃目標の一つだったことが推定できる。



調査地東側全景(北より)



調査地西側全景(北より)



調査地東端遺物分布状況（北より）



調査地東端遺物分布状況（北より）



南端薬莢集中部E（東より）



南端小銃弾、薬莢集中部（南より）



陣地状遺構 双円丘状遺構（南より）



陣地状遺構（南より）



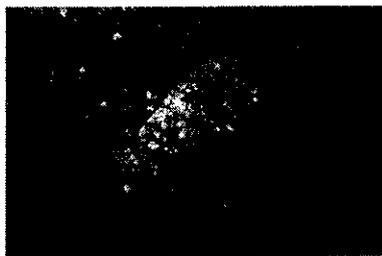
西側斜面 指差し先が砲弾着弾地点（南より）



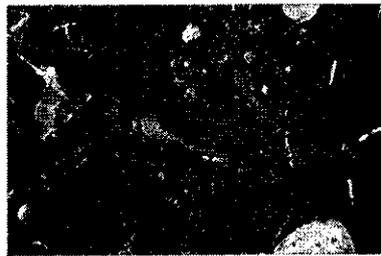
西側斜面遺物集中箇所（南より）



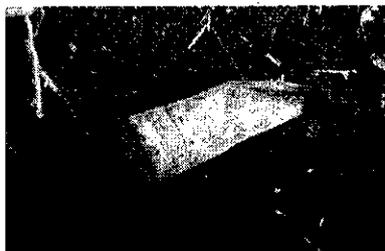
未使用弾 2・1



未使用弾 7



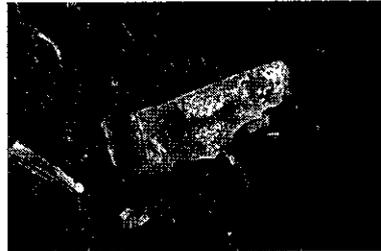
薬莖 10



薬莖 11



薬莖 12



薬莖 13



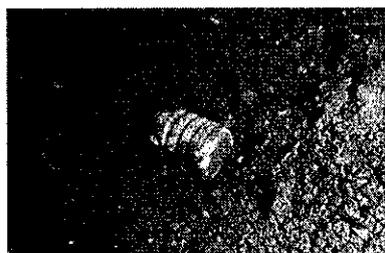
薬莖 20



薬莖 25



薬莖 34



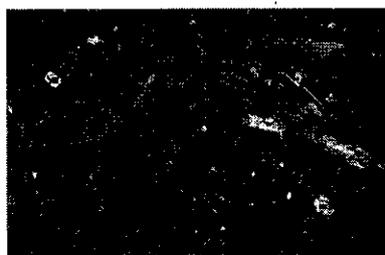
小銃弾 5



小銃弾 131



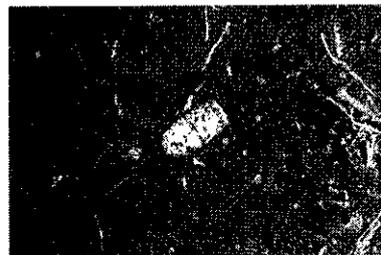
小銃弾 134



小銃弾 417・436



小銃弾 463



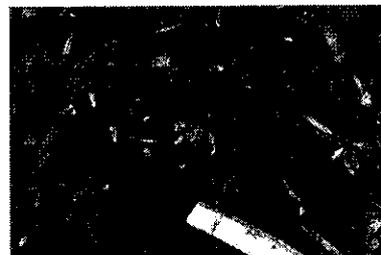
小銃弾 499



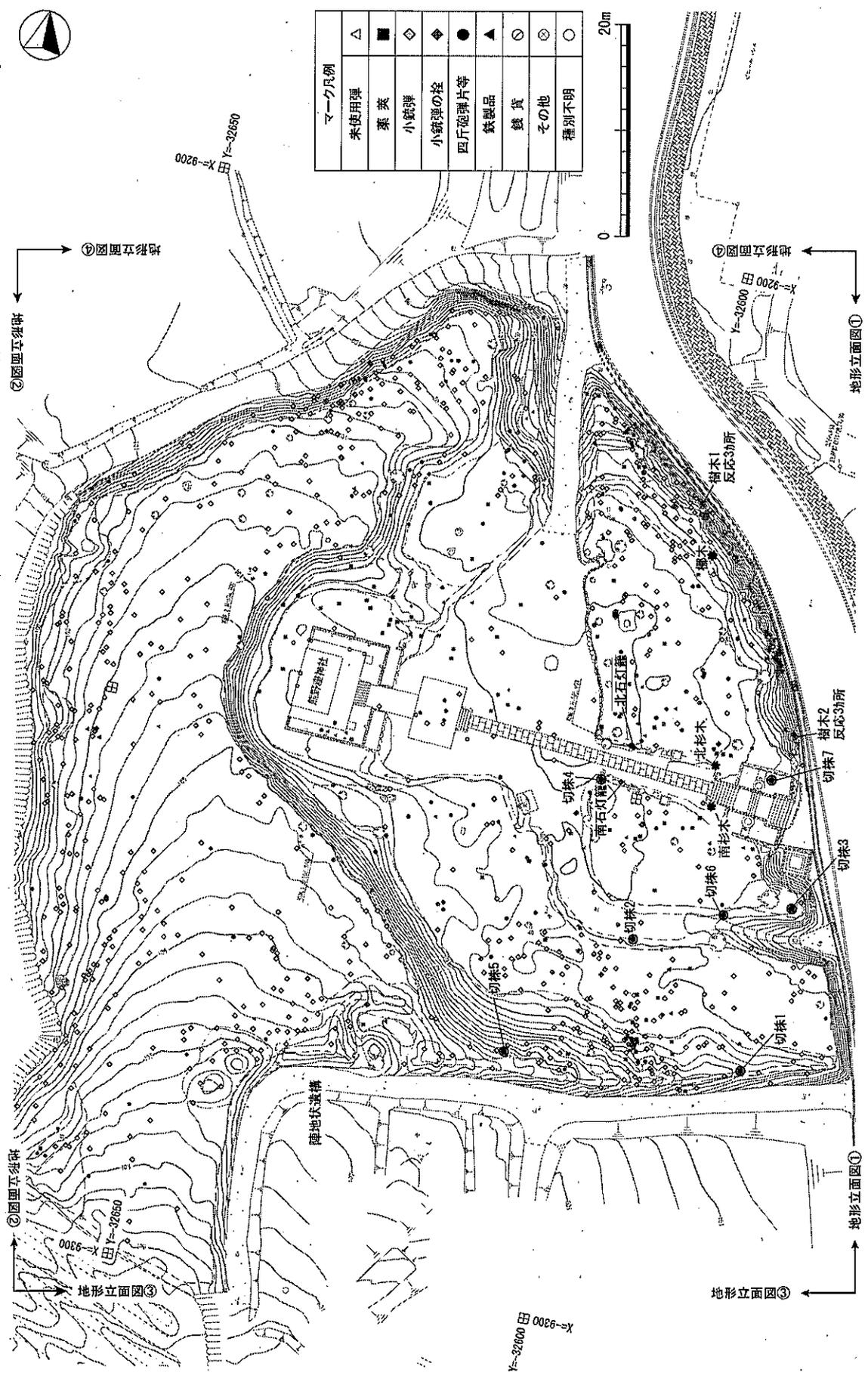
小銃弾 501



小銃弾 503

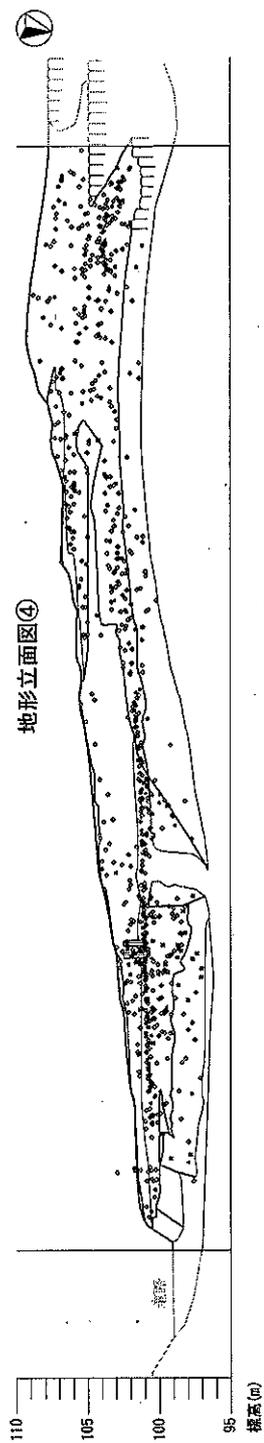
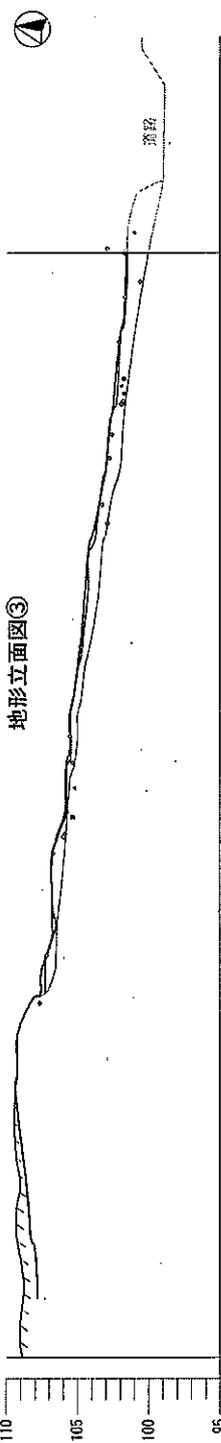
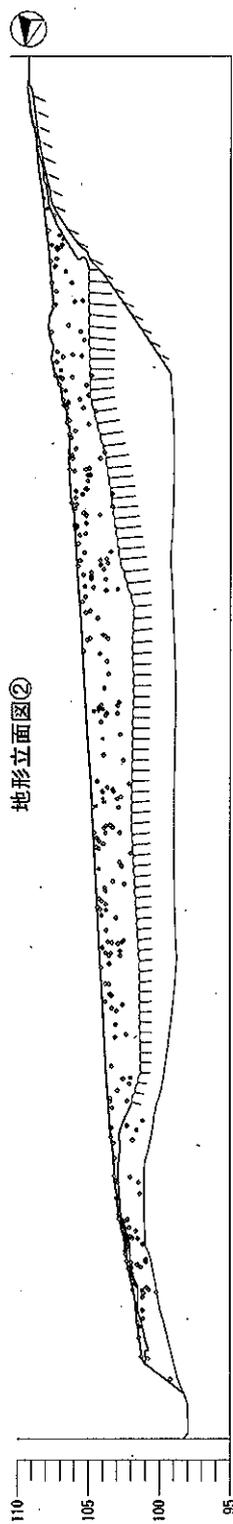
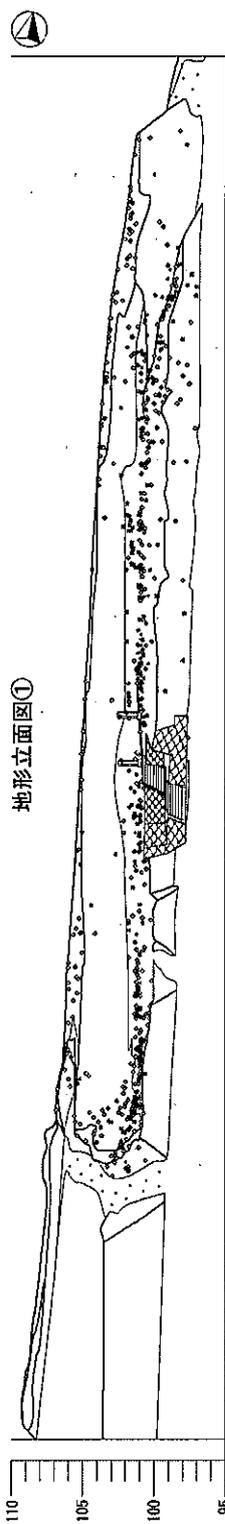


小銃弾 587

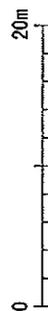


マーク凡例	
△	未使用弾
■	薬莖
◇	小銃弾
◆	小銃弾の殻
●	四斤砲弾片等
▲	鉄製品
○	鐵貨
◎	その他
○	種別不明

第33図 熊野座神社調査地遺物分布図1 地形立面図方向 (1/500)



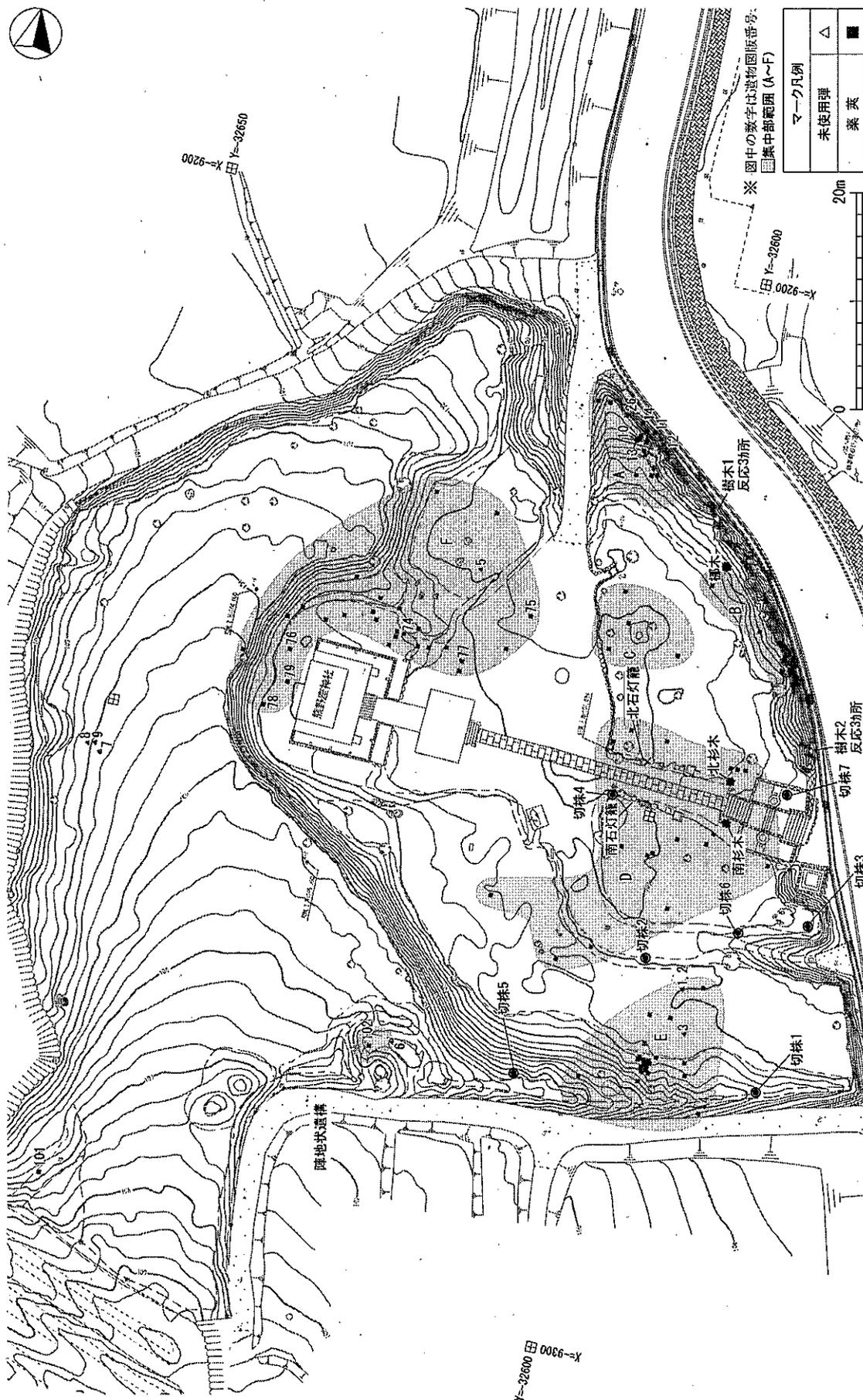
マーク凡例	
未使用弾	△
薬莖	■
小銃弾	◇
小銃弾の栓	◆
四斤砲弾片等	●
鉄製品	▲
銃貫	○
その他	◎
種別不明	○



第34図 地形立面図 (1/500)



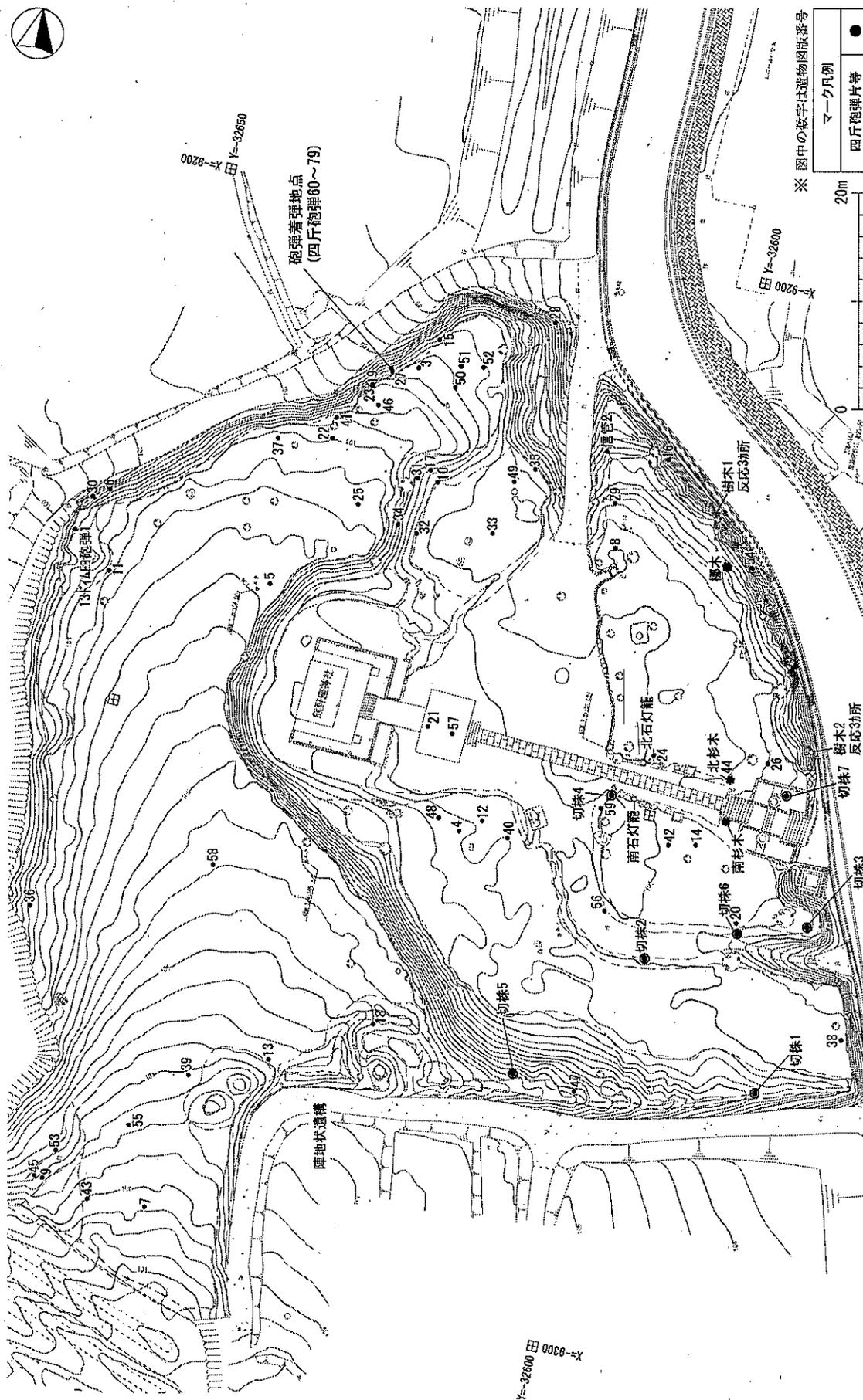
熊野座神社



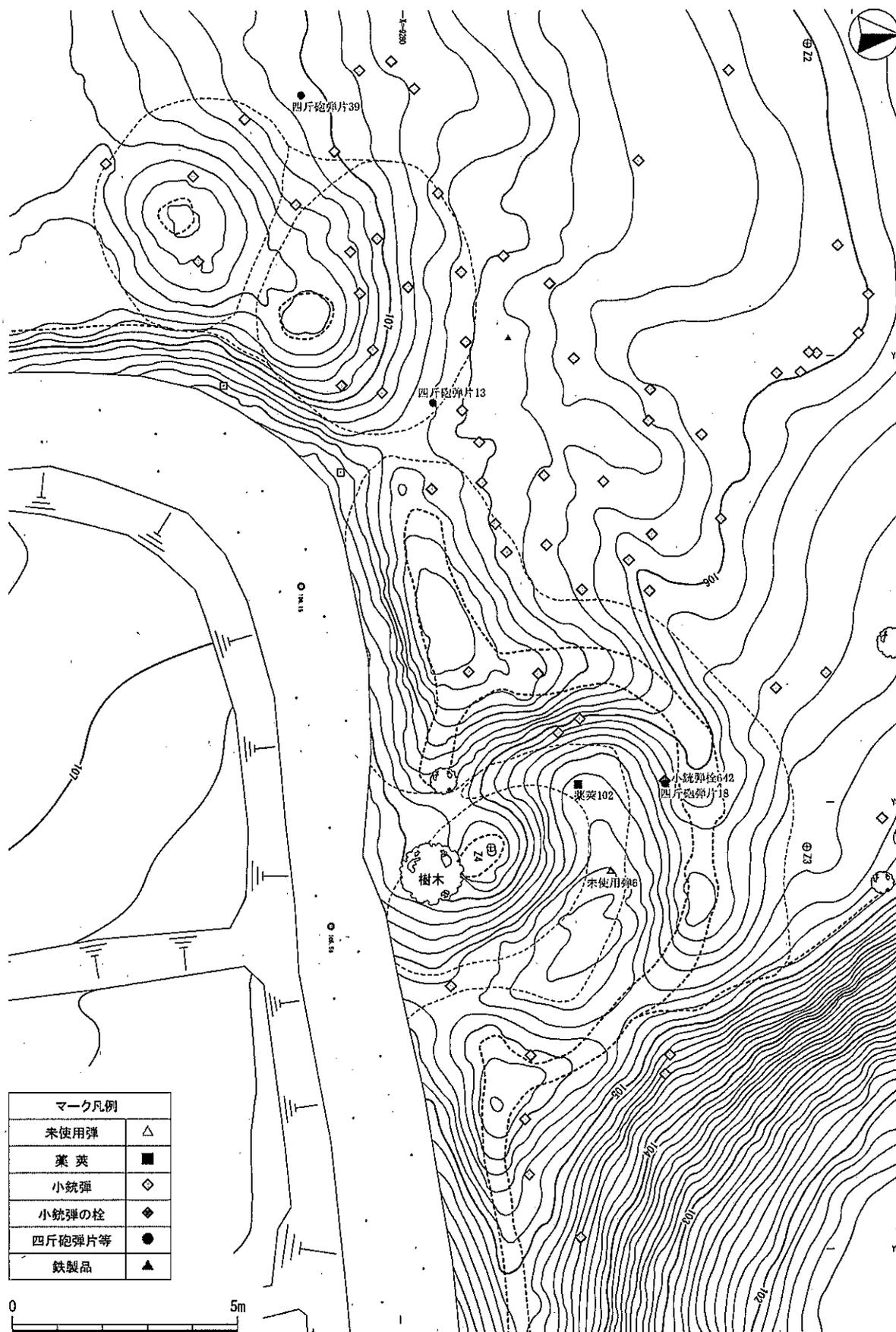
第35図 熊野座神社調査地 遺物分布図2 未使用弾・葉莖 (1/500)



熊野座神社



第37図 熊野座神社調査地 遺物分布図4 四斤砲弾片等 (1/500)



第38図 陣地状遺構 遺物分布図 (1/120)

7. 本道二ノ坂調査地

a. 調査地の位置と環境 (第3図・第88図)

本調査地は田原坂本道の二ノ坂中央部北側に隣接して位置し、東西 218m、南北 82m の東西に細長い三角形の土地で面積 10,041 m²、最高所は標高 93.96 m、最低所 70.5 m である。東隣接地には「谷村計介碑」があり、西隣接地は 2 m ほど削平され旧状を留めていない。

調査地は多くが傾斜地で、最高所から北東は北に向かう下降斜面地、西は西に向かう下降斜面地、東へは本道沿いに徐々に高さを減じて東端 89.67 m に至る。この間の本道坂道は西端 83.61 m で徐々に高さを増して調査地最高所近くでは 89.30m、ここから少しずつ高さを減じて東端 88.47 m に至る。つまり、現状の本道坂道は中央部までの西半が坂道で、東半は三ノ坂口へや下るほぼ平坦な道路となる。

この地形は当時から大きな変化はないと思われ、坂下からみて最高所手前までが敵方に自身の姿を暴露しない防御陣地になりうる斜面地で、この場所から東方は敵が視認できる地形のようだ。

本調査地と谷村計介碑調査地の間の三ノ坂口は、平面的には北から入る谷と南の急斜面地に挟まれたほぼ道幅を残すだけのくびれ部で、立面的には西から本調査地が下降し、東からも谷村計介碑調査地が下降する、尾根が中くぼみになる鞍部である。

ここが両軍衝突の最前線の一つになった。



調査地南側の台地(南より)



明治十年西南戦役田原吉次植木戦蹟図 (部分、縮尺任意、中央黒所が調査地)

本道二ノ坂

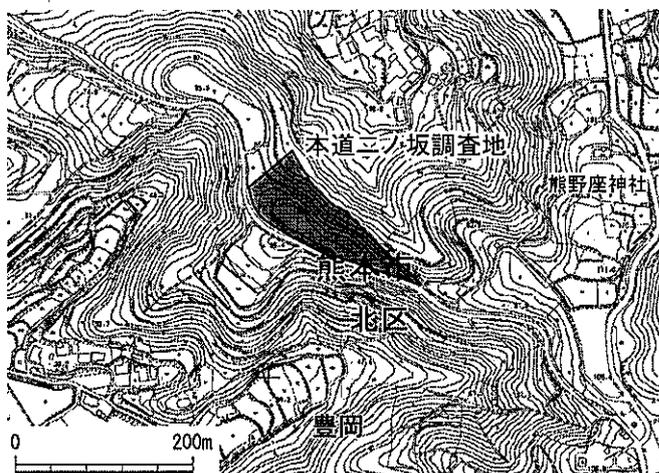
b. 現地調査の成果

本調査地は事前の踏査の際に、地元の方の聞き取り調査でほとんど手が入っていない土地であることを教えていただき、かつ、現地には浅い溝状の凹部が数条認められたので調査対象とした。

現地調査ではトレンチ調査などの土地を掘り下げる調査は実施せず、金属探知機による遺物分布調査と地表面の観察および遺物測点測量、地形測量を行った。これらの調査により塹壕らしき溝状凹部や遺物が調査地全体に分布すること、あるいは部分的に遺物の集中箇所が存在すること、かつ、地表面や地形の形状と遺物分布状況の関係が確認でき、戦場遺跡の理解に少し近づくことができた。

(1) 遺構の状況 (第88図・第93図～第95図)

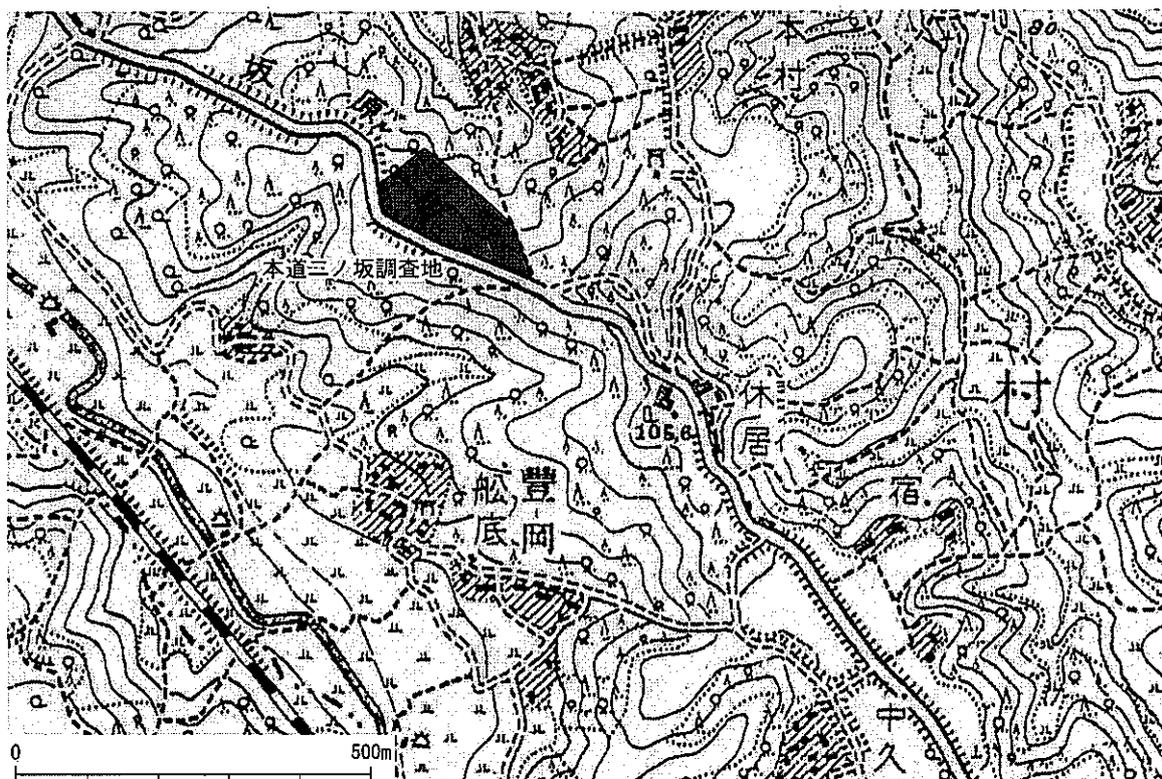
調査区の南西端、現在の田原坂本道の曲部をショートカットするように、5条の浅い溝状の凹部が南北に平行して東西方向に走る。最高所に向かって伸びるものの途中で切れる溝状凹部は3条あり、北から順



本道二ノ坂調査地周辺図(1/8,000)

に長さ23.8m・幅2.6～3.4m・深さ0.25m、長さ34.0m・幅1.3～4.4m・深さ0.13m、長さ14.8m・幅5.6m・深さ0.87mである。

次に最高所の南側を通過して現道まで通り抜けるのは2条あり、北側の溝状凹部は長さ73.4m・幅4.2～6.9m・深さ0.2～0.55m・溝底の高低差5.4m、南側の溝状凹部は長さ62.1m・幅2.4～5.3m・深さ0.28～0.62m、溝底の高低差5.3mである。この南側溝状凹部西半の周囲に薬莖や小銃弾など遺物が集中する。遺物分布状況から



本道二ノ坂調査地周辺図(明治33年、1/10,000)

資料5

みると、東側の最高所の高まりを東からの弾除けとする意図があり、ためにその西側の凹部に布陣したと考えられ、本凹部は田原坂の戦いの陣地跡の一つと考えられる。

また、これらの溝状凹部は、東隣する谷村計介碑調査地にも続いていると推定できるので、古い時代の「田原坂」の名残の可能性があり、掘り抜き道が埋まりきらずに残っていた浅い凹部を陣地として利用したことが考えられる。

(2) 遺物の分布状況 (第93図～第98図)

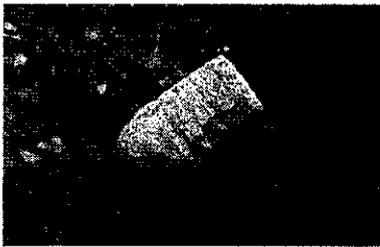
遺物分布は調査地の全域に広がり、調査地南西部の溝状凹部周囲の集中部と集中部以外＝全体的に散在する範囲に大きく分けることができる。集中部は薬莢と小銃弾などの遺物の集中状況が、集中部以外と比べて明らかに異なっている範囲をもって設定した。集中部の遺物出土状況は局所での戦闘実態をよく示しており、田原坂本道における戦いの具体的な姿の解明につながると考えられる。

集中部 スナイドル薬莢382点は長48m、幅2～10mの範囲に集中する。接してスナイドル銃弾406点、エンフィールド銃弾13点などの計426点も長35m、幅20mの範囲に集中する。他に未使用弾8点、摩擦管5点なども同集中部に分布する。これらは地表面に散布している状態で、地下にはさらに多数の遺物包蔵があると考えられ、今後の調査次第ではさらなる新発見が得られる可能性が高い。

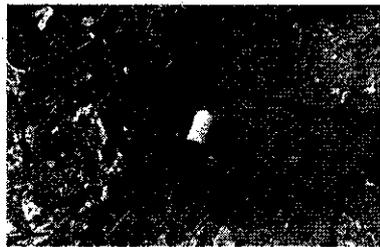
スナイドル薬莢の薬筒部は薄い真鍮板に外装紙が巻かれただけの作りで、底部を除いて堅牢な作りではないため、腐食が進み移動があるとすぐに壊れてしまう。集中部の薬莢は脆弱な薬筒部の残存状態が完存するなど良いものも多く、二つ折りの手てんご状態を示すものや外装紙も残存し、薬筒がほとんど残存していない底部だけのものでも外装紙が残るものも多く、採集地点からほとんど移動がなく当時の発砲後の状況をよく残していると考えられる。

残存度が良いものがある程度まとまっている範囲はA～Gの7か所あり、一つの範囲はおおよそ5,6メートル四方程度で、これらの範囲からは兵卒の配置状況や人数がわかる可能性がある。ただ、このうちには底部だけのものも相当数含まれており、すべてが残存良好のものばかりではないので、この良悪の混在状況をどう理解するのか、今後に残された検討課題である。

小銃弾に特筆すべきものがある。317は小銃弾が他の小銃弾実包に衝突したもので、おそらくは陣地に置かれていた実包の詰まった木製弾薬箱(側板厚2cmほど)に直進飛来した小銃弾が命中し、中の未使用実包が暴発してさらに誘爆を起こし炎上した状況が考えられる。戦闘最前線の状況を教えてくれる貴重な遺物である。近くでは雷管室上部が錆着した薬莢380や弾薬箱のネジ釘7点も採集されている。



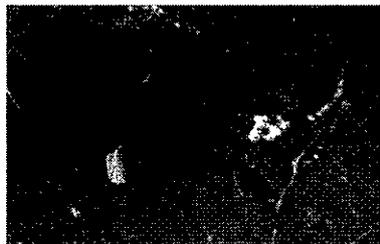
スナイドル銃弾 11



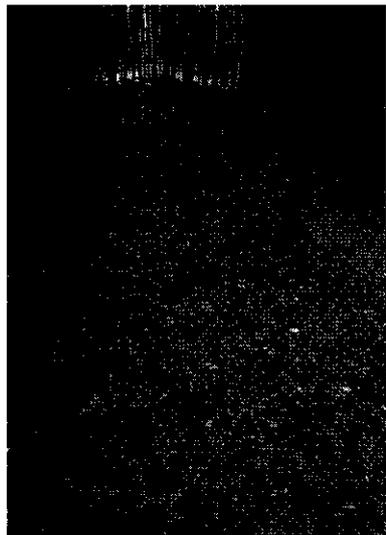
スナイドル銃弾 42



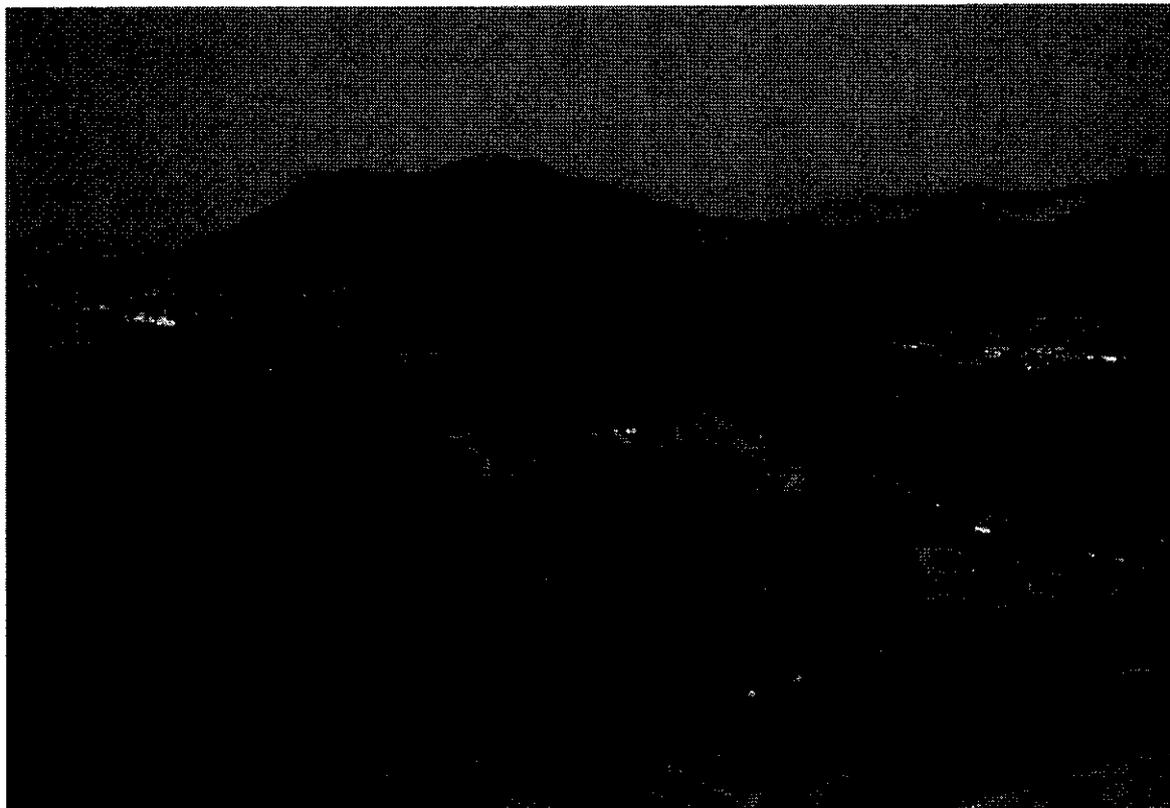
スナイドル銃弾 164



スナイドル銃弾 126・346

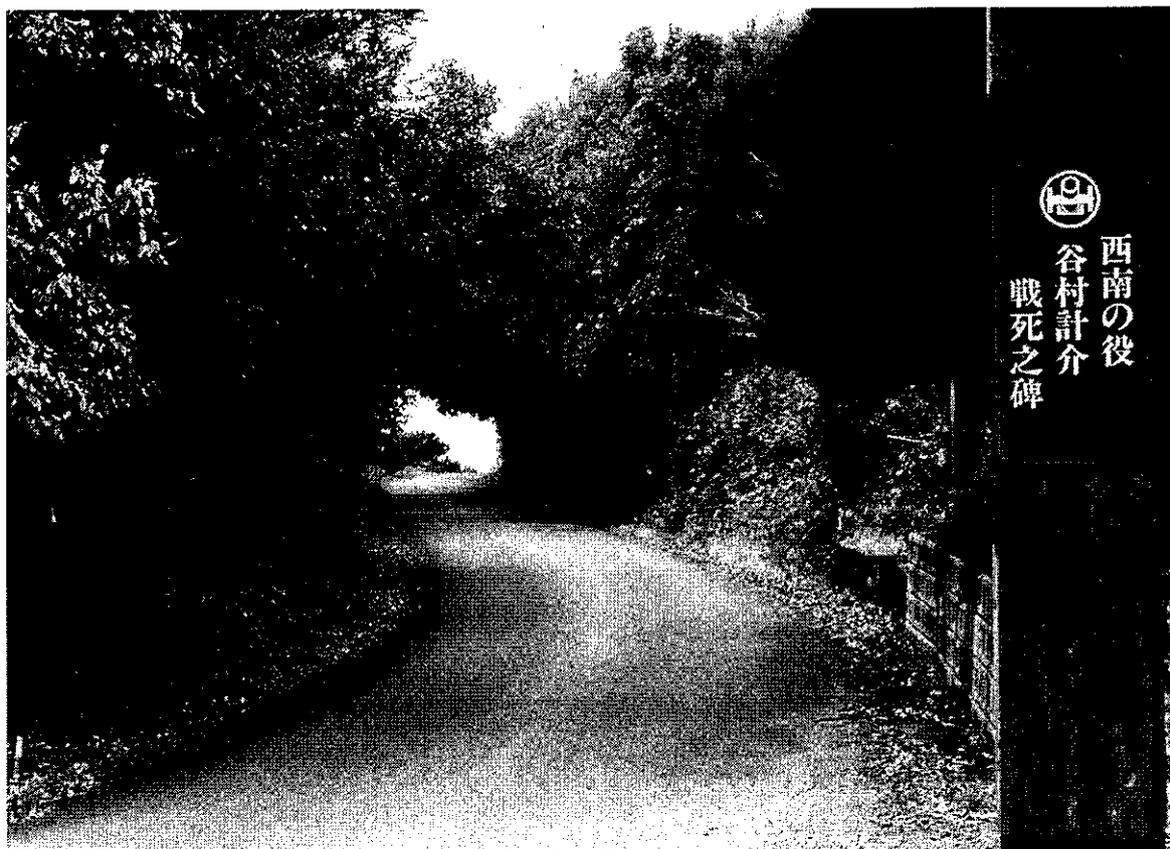


調査地東半部(東より)



本道二ノ坂

調査地遠景(南東の田原坂公園より)、中央が本道二ノ坂調査地、右が谷村計介碑調査地、正面奥は木葉山(権現山)、左端は木葉の町並

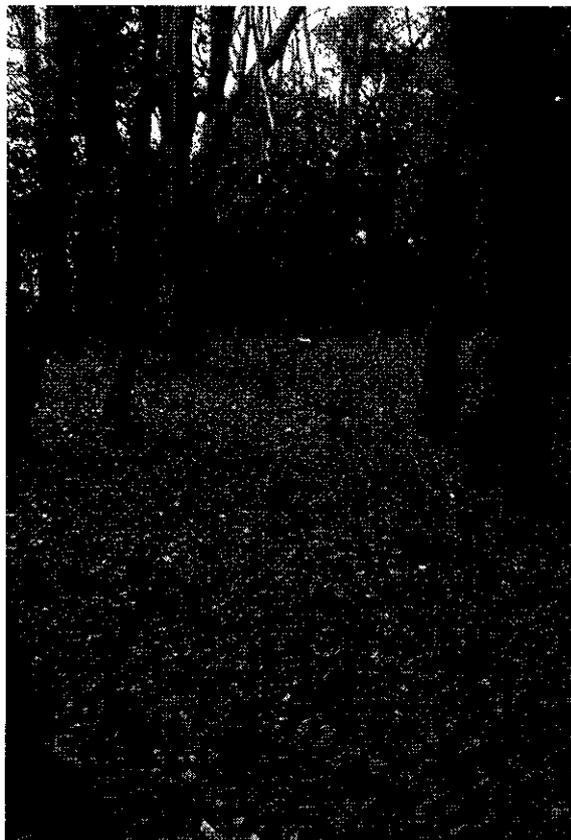


西南の役
谷村計介
戦死之碑

調査地近景(東より)、現在の田原坂二ノ坂、中央右が調査地、奥が政府軍砲台跡



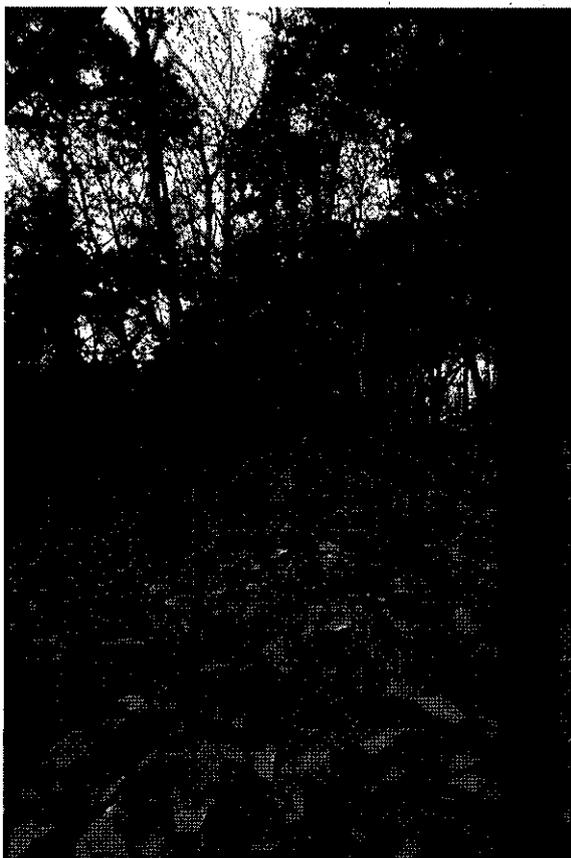
調査地西より東方みる



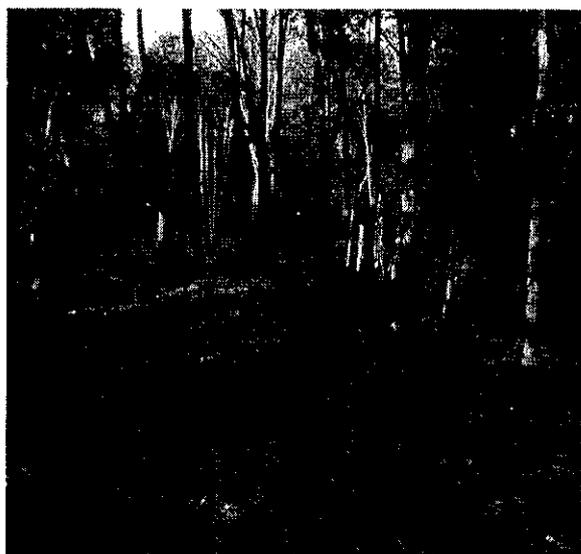
東より西方の遺物集中部を見る



北側の斜面(西より)



遺物集中部近景



最高所の高まり(東より)、奥に遺物集中部が見える

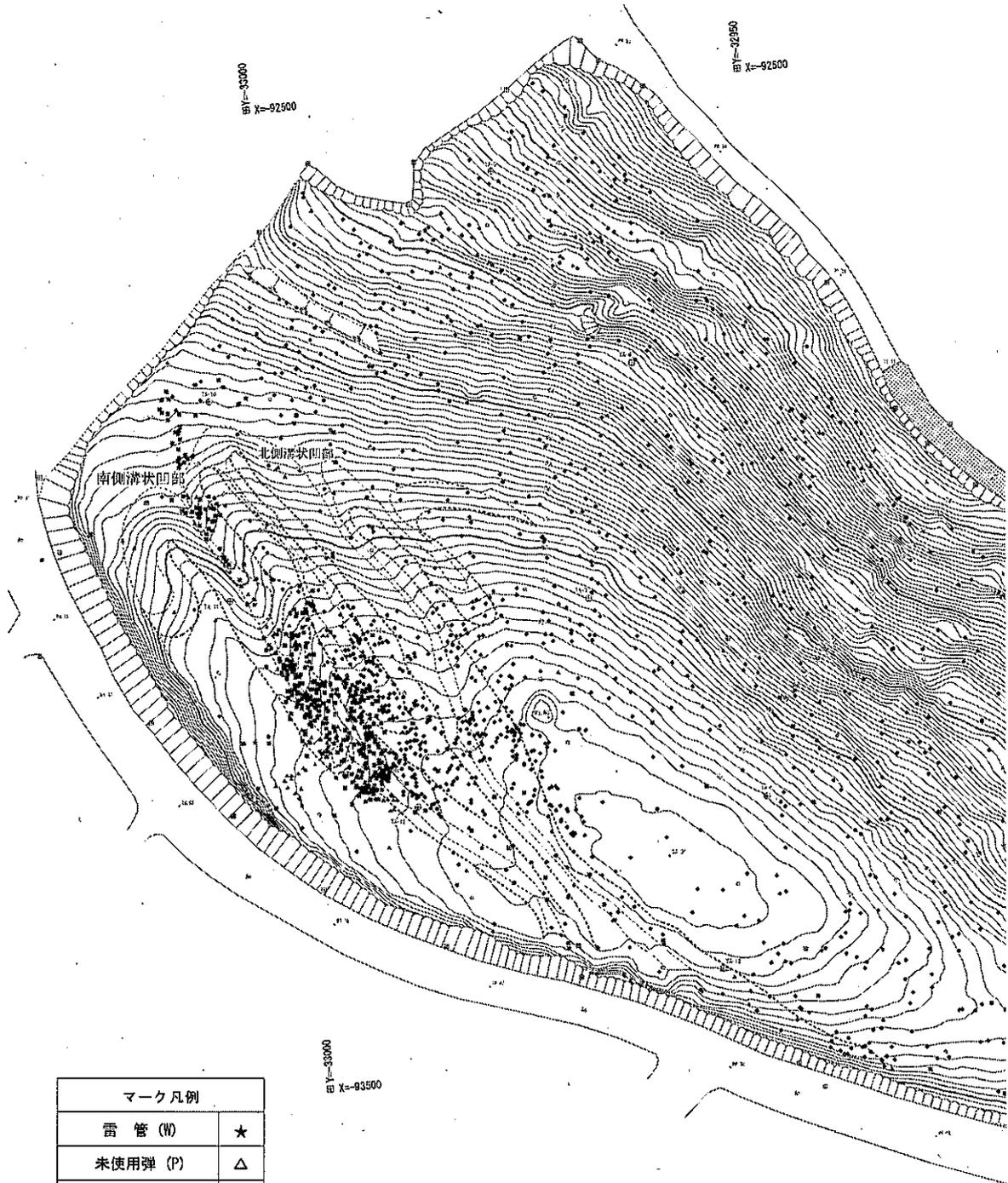


遺物集中部(西より) (牛嶋茂氏撮影)



南側溝状凹部(西より)と遺物分布状況

本道二ノ坂

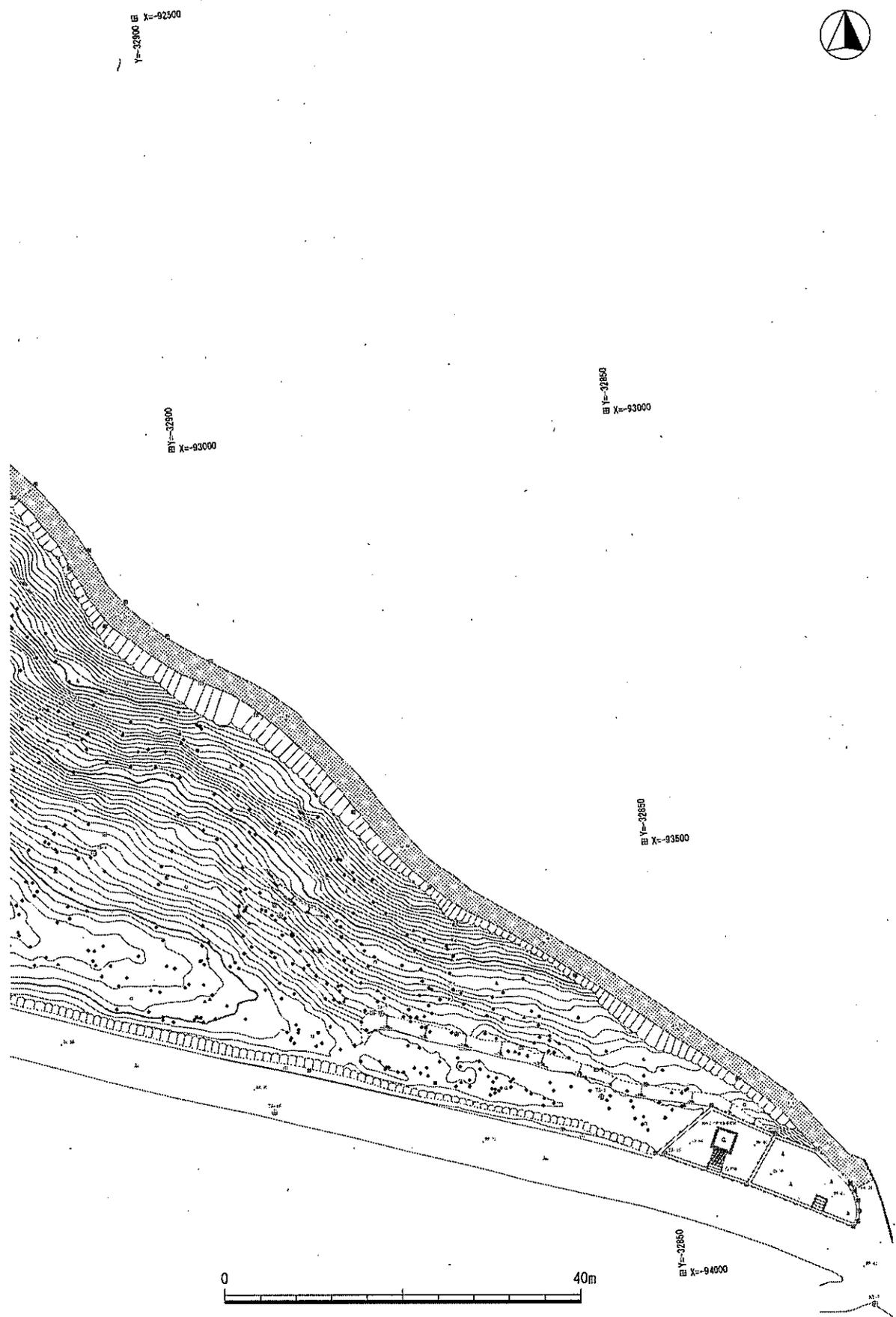


マーク凡例	
雷管 (W)	★
未使用弾 (P)	△
薬莖 (R)	■
摩擦管 (O)	◎
小銃弾 (Y)	◇
小銃弾の栓 (PK)	◆
四斤砲弾片等 (BL)	●
鉄製品 (B)	▲
古銭 (BR)	⊙
土器・陶磁器 (GR)	●
その他 (G)	⊗

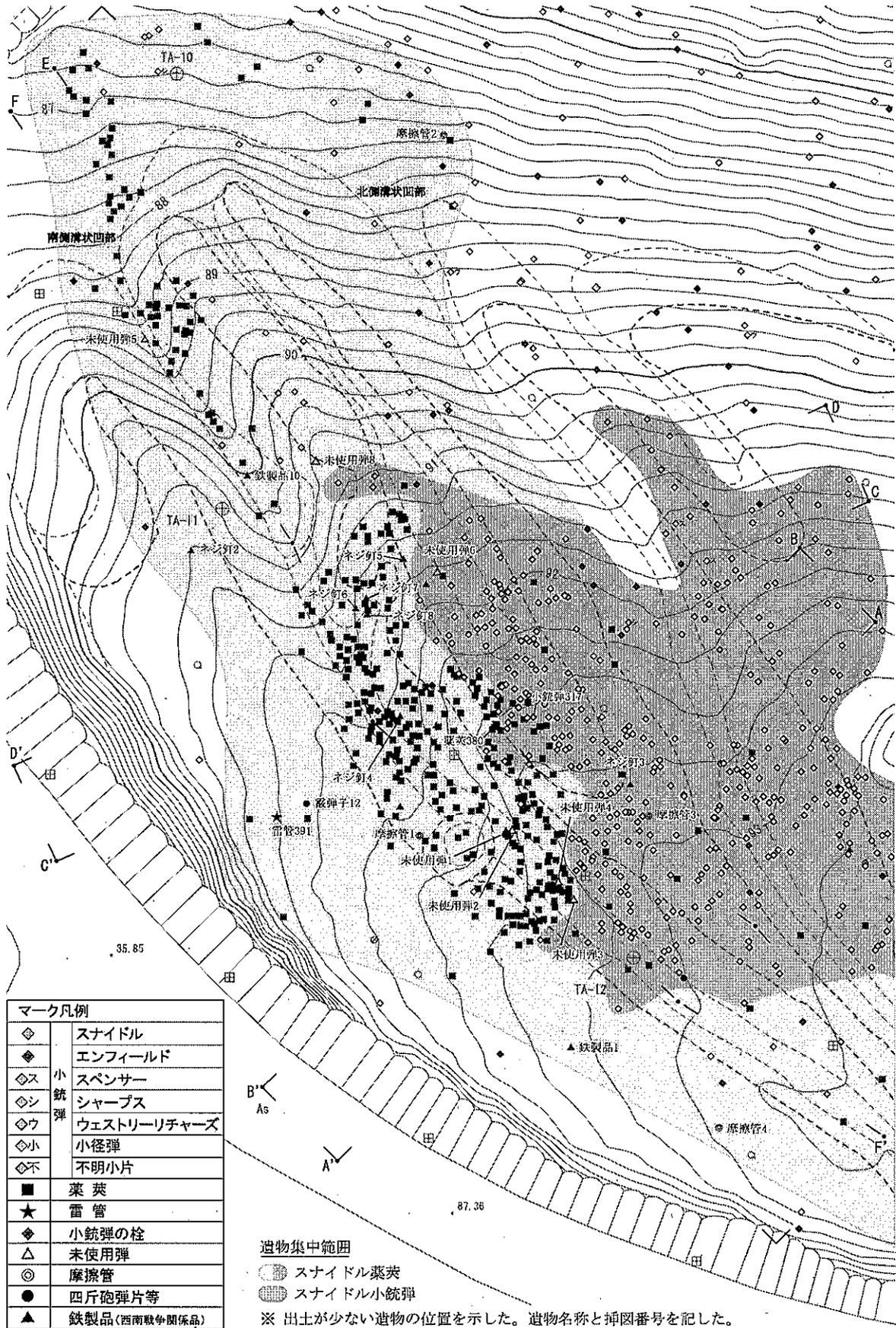
第93図 本道二ノ坂調査地 遺物分布図 (1/600)



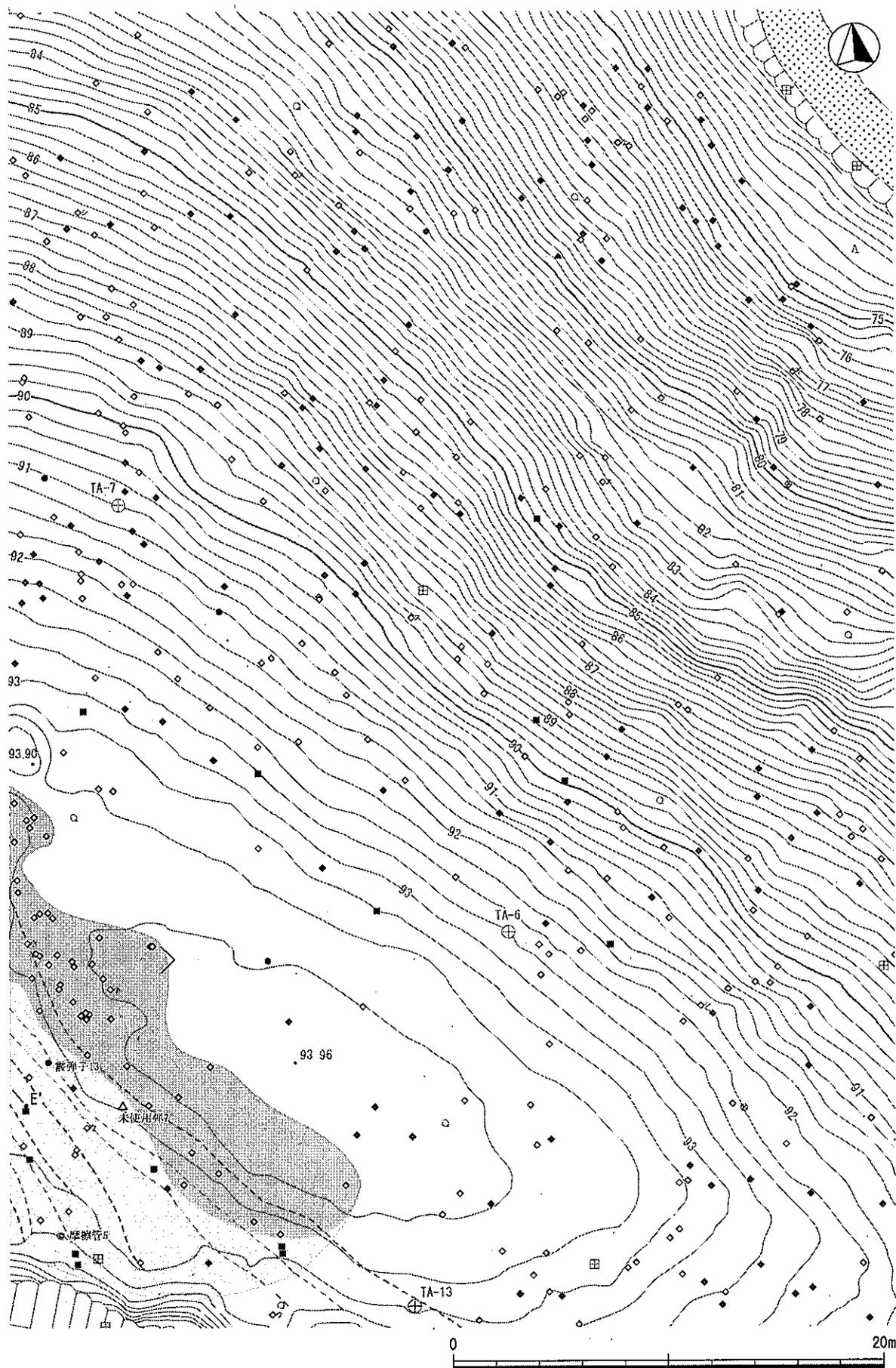
本道二ノ坂



本道二ノ坂

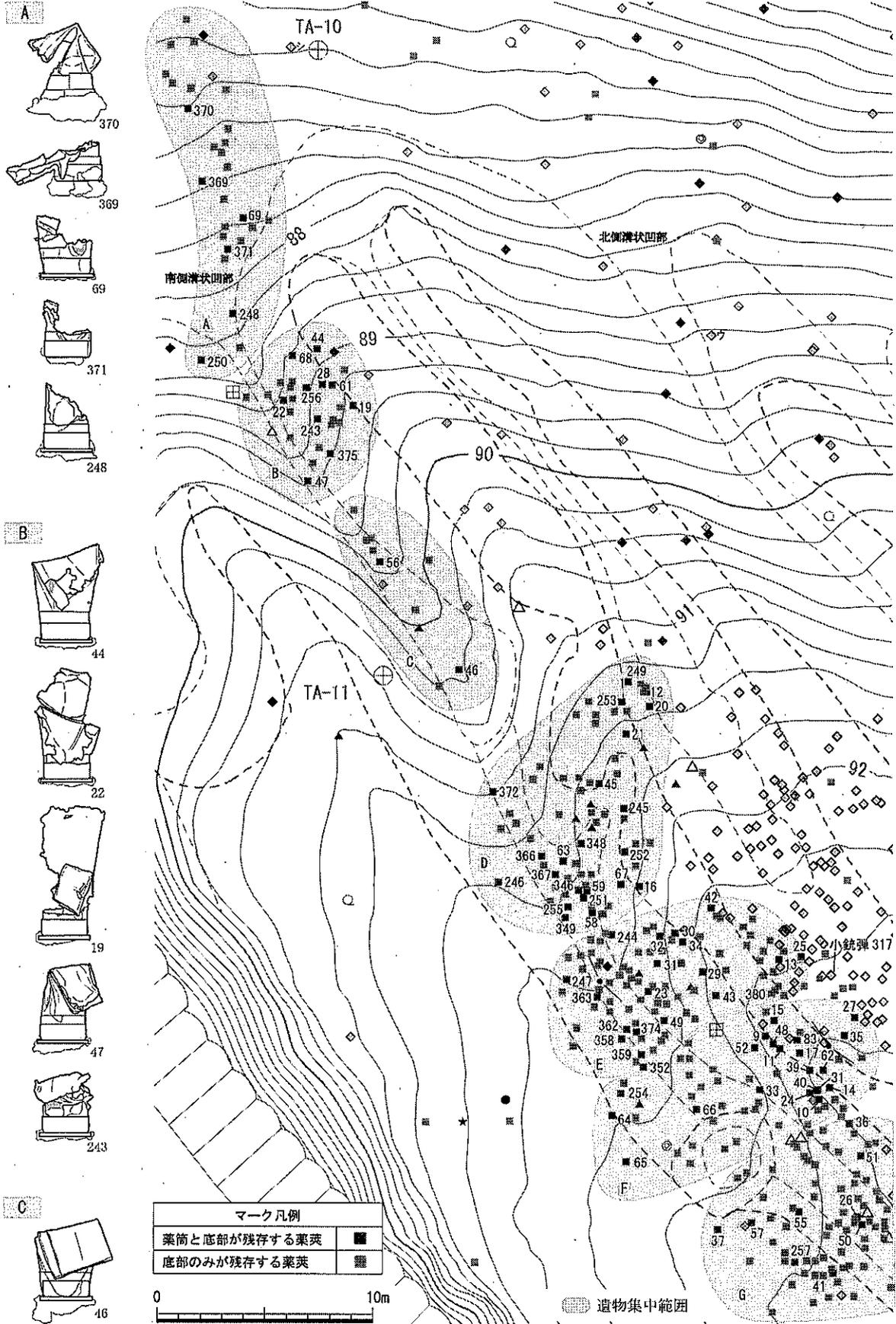


第94図 本道二ノ坂調査地 薬莖集中部と小銃弾集中部 (1/250)



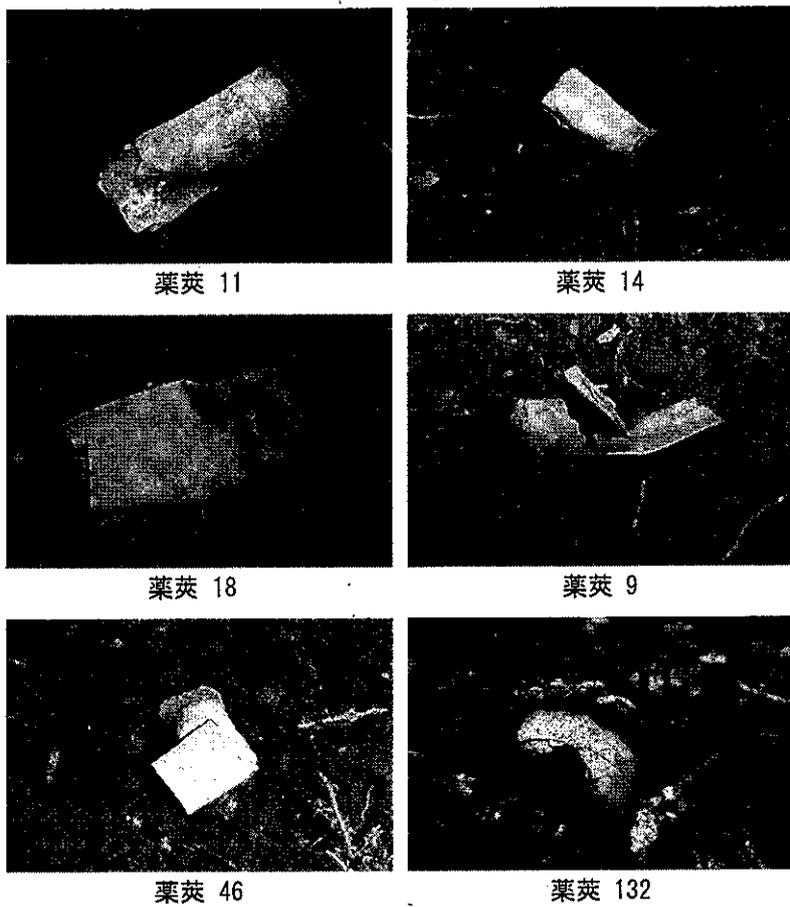
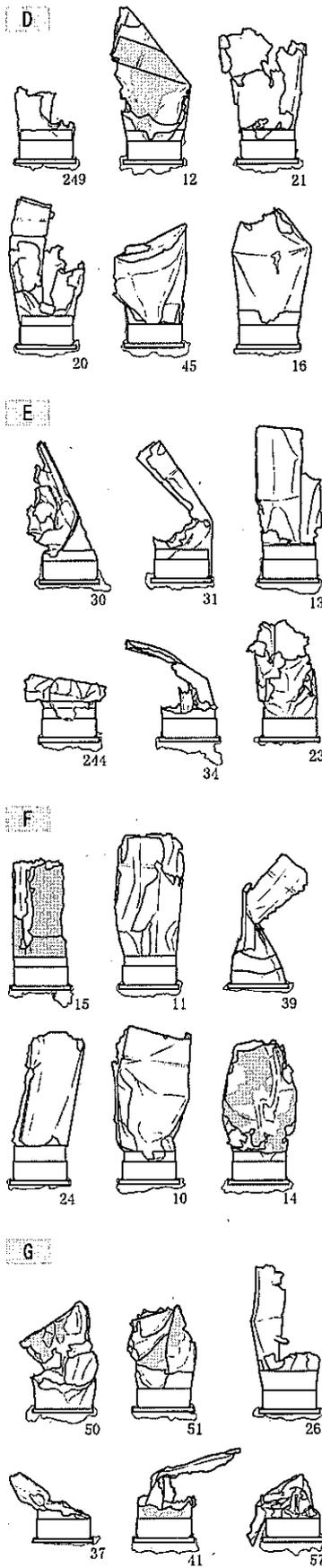
本道二ノ坂

本道二ノ坂



第95図 本道二ノ坂調査地 薬莖集中部の残存良好薬莖分布 (図縮尺任意・薬莖1/2)

本道二ノ坂



挿図番号一覧表

A	69, 75, 86, 104, 118, 150, 161, 230, 235, 240, 241, 248, 250, 262, 274, 278, 284, 338, 345, 360, 361, 364, 368, 369, 370, 371
B	19, 22, 28, 44, 47, 61, 68, 89, 110, 113, 120, 126, 129, 163, 243, 256, 267, 268, 275, 276, 280, 336, 344, 375, 381
C	46, 56, 74, 97, 123, 269, 312, 333, 339
D	12, 16, 20, 21, 45, 58, 59, 63, 67, 95, 103, 114, 122, 127, 158, 160, 165, 183, 211, 245, 246, 249, 251, 252, 253, 255, 258, 263, 264, 266, 270, 272, 281, 288, 295, 296, 297, 302, 303, 304, 305, 307, 313, 329, 330, 331, 334, 340, 341, 342, 343, 346, 347, 348, 349, 350, 357, 366, 367, 372, 378, 379, 386
E	13, 23, 25, 29, 30, 31, 32, 34, 42, 43, 49, 92, 98, 100, 108, 124, 125, 137, 140, 148, 153, 154, 159, 162, 169, 171, 174, 176, 179, 184, 191, 192, 200, 208, 209, 210, 213, 221, 223, 229, 234, 244, 247, 265, 277, 279, 282, 283, 285, 292, 293, 294, 306, 308, 309, 310, 311, 315, 316, 320, 321, 322, 325, 326, 327, 328, 332, 335, 337, 351, 352, 353, 356, 358, 359, 362, 363, 365, 374, 377, 380, 382, 383, 387, 390
F	9, 10, 11, 14, 15, 17, 24, 27, 31, 33, 35, 39, 40, 48, 52, 62, 64, 65, 66, 76, 78, 83, 88, 91, 102, 121, 139, 142, 149, 151, 164, 175, 180, 181, 254, 185, 186, 199, 212, 214, 215, 216, 227, 231, 238, 239, 254, 298, 300, 312, 318, 376, 385, 388
G	26, 36, 37, 41, 50, 51, 55, 57, 70, 71, 73, 77, 79, 80, 82, 87, 93, 94, 10, 105, 107, 109, 112, 115, 117, 119, 128, 130, 132, 133, 134, 135, 143, 144, 145, 147, 157, 166, 168, 172, 177, 182, 187, 188, 189, 193, 194, 196, 197, 198, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 217, 218, 219, 220, 222, 224, 225, 228, 233, 236, 237, 257, 287, 291, 299, 314, 323, 384

第96図 本道二ノ坂調査地 葉莢集中部の葉莢と検出状況

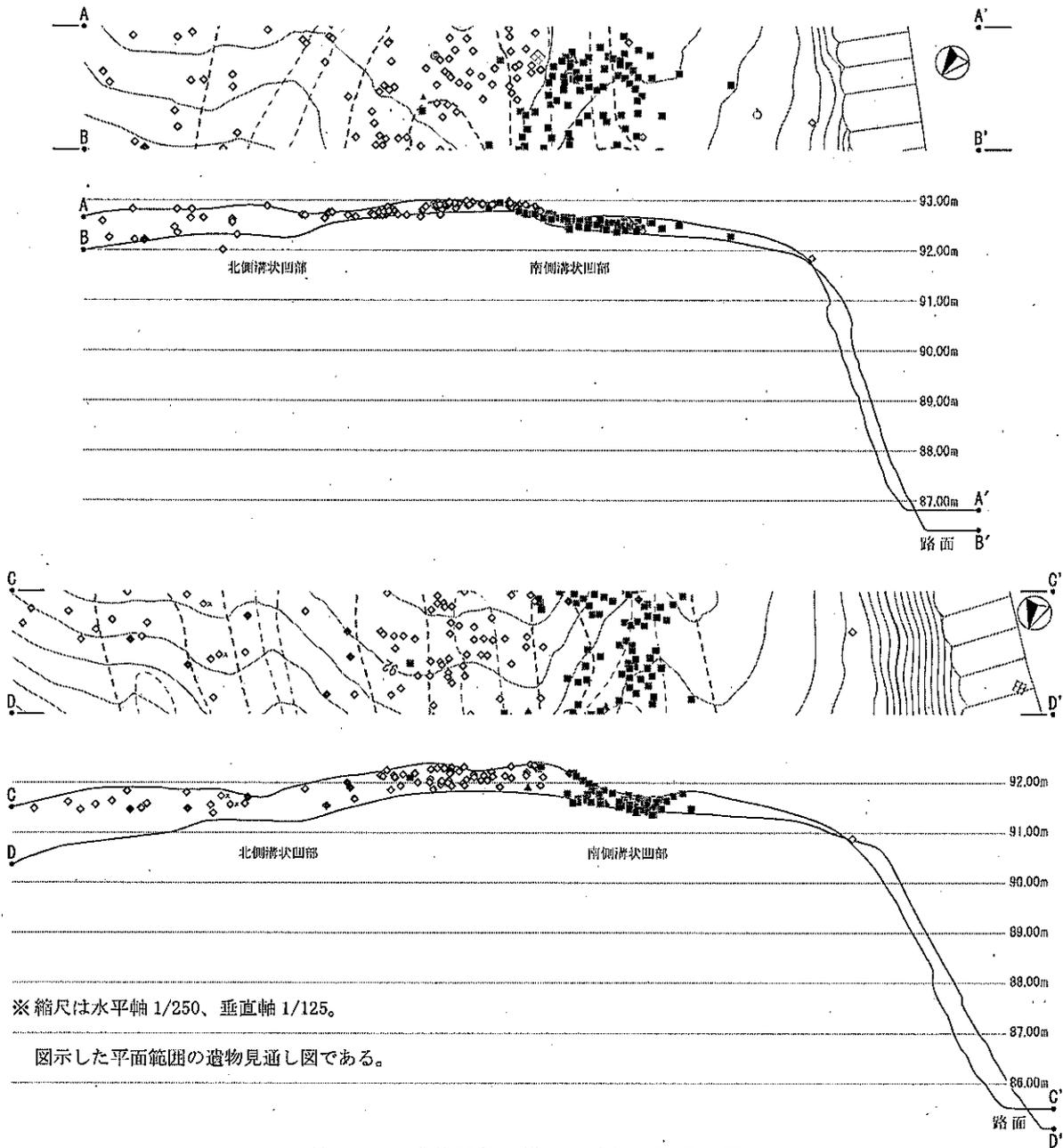
資料5

摩擦管は5点のうち4点が現道沿いで確認された。玉東町二俣瓜生田官軍砲台跡調査例では轍跡周囲に集中しており、摩擦管は発砲地点の近くに落下するとの教示もあるので、ここでは南隣する現道上で砲射された可能性がある。砲弾片は集中部以外からの採集も少なく、本調査地にはあまり砲撃が加えられず、銃撃戦主体の戦場であったと考えられる。

集中部以外の遺物は全体に散在し、北西端と東端がやや密でその間は粗である。菓莢は少なく、小銃弾は集中部の倍ほどの1075点ある。小銃弾のうち特にスナイデル銃弾Bタイプとエンフィールド銃弾の占める割合が高く、スペンサー銃弾などもあり、他調査地を含めてもこれらの小銃弾が格段に多い。

また、大正九年一月発行の『明治十年西南戦役田原吉次植木戦跡圖』に記載されている両軍の布陣状況一西から政府軍が攻撃し、政府軍砲兵陣地があり、薩摩軍の防衛線の近くで白兵戦があり、両軍陣地が近接している一が正確であったことも併せて証することになった。

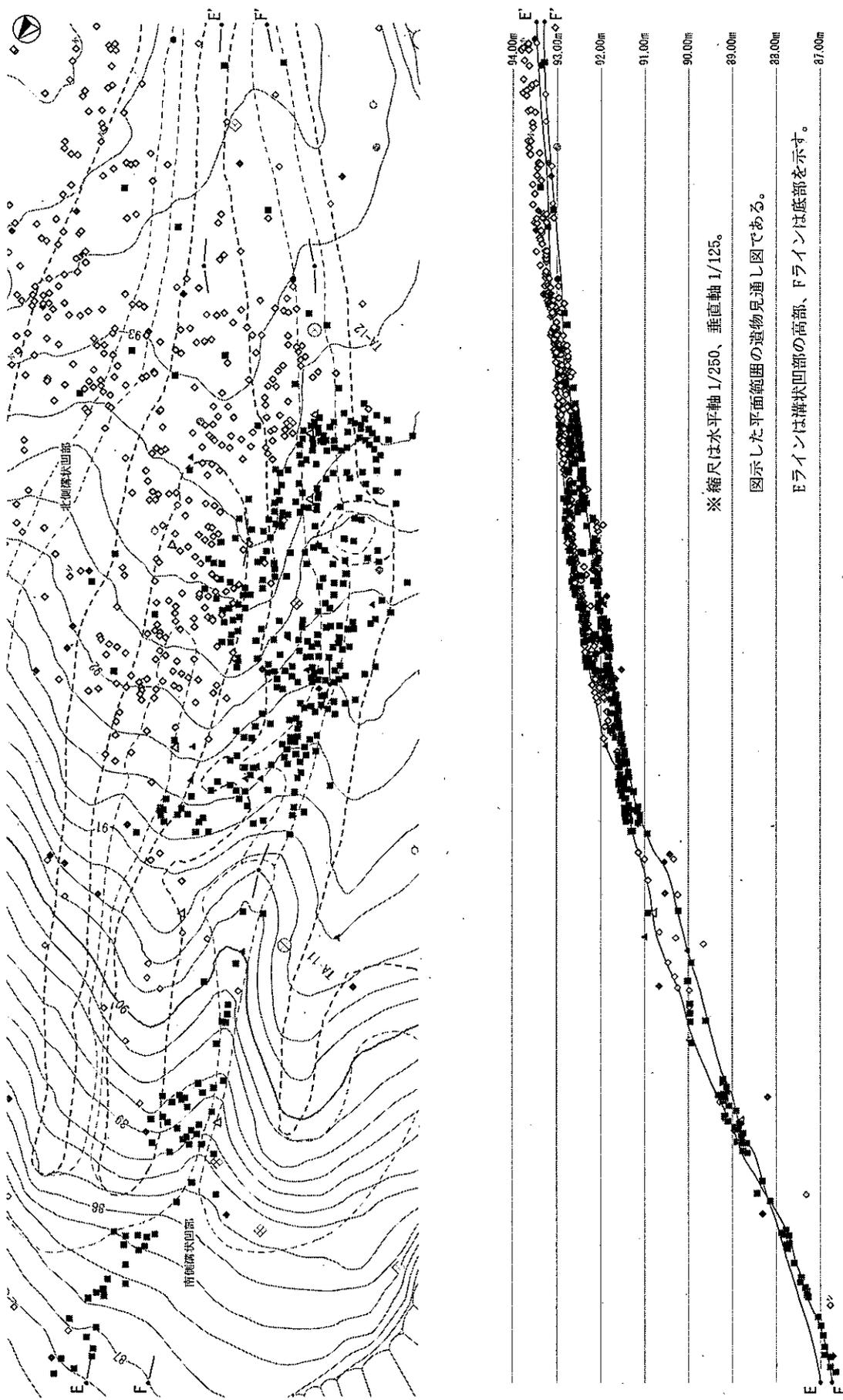
本道一ノ坂



※縮尺は水平軸 1/250、垂直軸 1/125。

図示した平面範囲の遺物見通し図である。

第 97 図 溝状凹部の横断と遺物の見通し図



第98図 溝状凹部の縦断と遺物の見通し図

※縮尺は水平軸 1/250、垂直軸 1/125。

図示した平面範囲の遺物見通し図である。

Eラインは溝状凹部の高部、Fラインは底部を示す。

本道二ノ坂

